源氏二十卷抄　十一

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

源氏物語抄巻第十一

目録

梅ヶ枝

ねのゝ松

昭和廿六年十二月十日

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

857-118

梅の枝　十八　源氏世九歳

帝國圖書館藏

以詞ゐる　梅のもを僧（サイハラ）ゐるゐへ　れ詞也

の二月乃事ゐる

御もとの事　ゐる姫君は御覧（モ）十二歳はうちの御

て　ゐのゐ成（ト）ゐして

春之ゐ　今上（ニシ）　中也

朱雀院の皇子今年十二　今又冷泉院　二月乃例ゐ模（ウツ）

き　冷泉院ゐ対應和三年二月廿八日御元服　行

ゐまつる　ゐる姫君入内乃事

の月　節会ゐも見て後ゐ　ゐる時分なり

大貳　たてまつる　ひと寒のまてきゐへ　行

すべて之大就なるべし一説又七年なれども唐招を上例
年代事乖釈者十指乃量なと道房説系の説を上と云〻
れぬひ　蓋　霞　数説　おなじことの名なとうとそら
てん内ハ必錦なり
はりとも　苗の端也
こまうと　源氏れ人なり
むちんき　緋金錦
金と織付うう錦也　金襴乳
一説　奈良乃久　緋袋とも云
このなひのあやうとの　綾羅　山度と云也今説乃
大意也　花洛説　人〻て洛ふなるを
むうとも　沉香也
うちみもとうも　内こうも又まりみも仏法なり
くれうと　織田　頭合の用之
うんわう　うひとそうこと　そまうや
ゑとそんとよむへ乃ゑるすや
ゑ和法門　仁明天皇年号也　浄土の法門なりて
大乗と大そうと云は説経うあまこあり
沸いまめ　不男結　男方と結後とも　あまを秘て
ゆ結うと何とて源氏れ云ふうとうと
うへハひんのうの中れもれちりて　うへを紫上
敬出と云ふ　花奇説　不絵小寝没と云て毋屋の内

とまりたりをてゆ　と侍て外様なる人はなとひいるる不
とゝ云也　御帳の澄子　くうへ　くるる城中乃也ゝ
八條乃式部卿　宮　親王　仁明天皇の御子系圖　河と
花と相遠きり　花島の委　不審同黒方ゆ　式部
方加　撥　方　式部　とし　堂上乃文字の御　の説
と伊ひ源氏のとハ不男偽とゆ　のてとつひくるむむ也
うゝあのもこ　母屋　廂　東面　厨子　子　菅八合　中　二合
八香壺　菅也　東乃厨子　うゝ　ゝ　一合　蓑　壺白
文乃ものうゝ　茅　くゝたる壺也　重箱　必
あゝ蓑壺　白　入て　梅花　ゆ　種　菅　菅　母　壺
中ゝ　あるとゝ云ゝ　二階乃　御　ゆ　母　ゆ

兵部卿　兵部卿
花散院　撫子院
ちりすゝゝ　高光日記　ひえ　山　御　御　ゆ
人　菅　こひて　ゆ　れ　ゆ　ゆ　きる　に　梅花
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
思　遊　春　て　ゆ　き　る　梅花　ゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゝ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ちんのもこふ　沉の船

沉りの沈香　瑠璃の壺　茶碗きなどいふのこと

ひも　西文抄　重箱　膳具　香炉　花瓶　組文

今年心象の松も梅も枝のやうにもまく　雑

ものなり

あん紙　紙　ふ方に縁ある紙なり

松の付たる松ハ色に憚る事也　西方を重中なと

新蔵人　ちられぬ白ふたとへ

花の兵部卿　今秋院にてまさぬとちらぬ枝と

早下の心也　うつらん神を姫君乃御神のためにて嫌物

重陽の日の神ハ　あさるふ〜とする

宰相乃中ね　夕雲也

こうちのうきね　五梅のうゝをち物にてうなのおのを

蒙〜きねなる色〜

うにて文のうゝ　紅梅うゝ物の落梅なり

くゝくゝ　曲字　又隈　のくゝとにあるやう

にと也　地乃町くれまてと可心也

法師乃にいてる　源氏の次ぎ法院へ出御遊を書て文

色色せ紙なり

むらしに　はの香ハ花くゝをさなり

法師人のとゝめぬ色うにひけひとをんすれやるゝ

兵勝　ふうくゝかくれひやゝ　京南

やうらん　文ゝ　ゆくゝ　ふるまひてはすくこと
の次ゝ　あの　秋院へ　乃　ゆかせたまふやとこと
ゐるべし　別乃　方と　共へと　云ふ也
海のやうふを　ゆやうれる　夾くくしくたてくする
すきくし　文　撫なれと　又もるゝ　みれたあるれハと
るゝと　答へ　中ゝ　源　詞也
ひとゝにく　姫　兄と　卑下なり
うやき人　外人　不意ゝ　應笑
外人と云ふ也　秋好を　蒙　見れ　勝　法ゝ　なり
ふゆうれをする　文　中　文乃　沸ゝ　する
侍ゝ　姫を　奔ゝ　詞也　秋好ハ　幸人　なるゝ　ゝ　あや

うゝとのゝと云ふ也　哢　金葉　運　ゝ　船　ゆゝ　ゝ
入ゝ　海と　ゝ　ふ　ゝ　ふ　ゝ　あ　ゝ　と　ゝ　ら　む
ゆゝ　番乃　茎　を　ゝ　ゝ　ゝ　ひ　ま　ゝ　れ　と　な　り
れふりこせん　考ゝて　姫ふの　ゝ　ん　梅の　ゝ　ゝ
ゝと　云人　ゝ　ゝ　ふ　共　ゝ　ゝ　て　ゝ　ゝ　云ふ也
ゝ　み　ゝ　ゝ　れ　ゝ　ゝ　の　一　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
いふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
いさゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

うゑむ源と見るれも梅花ハ梅ゆりと重花と重のをや
おうつめと三本を松ゆ下りて四季ゆ埋り根赤

曲　河花

惟之宰相　宰おうゆ紅すらうあ〜ゆ初てんやその子
兵衛乃せう

いとをきふたりや　むつのしきひるる
おすーう　源も四方ゆ三本を滅源香をひこ不ゆ三とかり
うきあしせ　俤ゆきくとゆ心ゆや　批判ゆ
さらんど　源業花すゑれとゆをなる百〜又花乃
香を爲ゆ枝と早下なまとゆをなり
俤後をれとゆれ清ゆ　れとゆれをゆ云ゆや　源も三方

と合ゆくゆ秋院乃三本勝ゆとゆいをんたあるや
梅花　業上不男俤　八條式かゆお俤なるへそれとも春
ゆれまゆくのゆよ梅花勝ゆとゆや対と見たるゆ元宴
俤新の祝をを丁子とゆ〜ゆしゆ元花やのなるとる
ゆやきゆ　ゆれゆ〜ゆゆゆなり
ゆゆの用　対ゆ梅ゆ
うすくゆ　梅業一種　花芳帝
をゆ清ゆ　ゆ石上対ゆよゆるゆ〜ゆ梅業なる百
きとゆきとゆゆゆゆゆ三夜香　一名百和合と云
ゆれ乃三百ゆやゆん　天平の治門世乃三八六帝
と梅業雀とゆ〜ゆ今三百ゆやをゆ〜ゆをゆ〜ゆ

弟の宮入給ふの
きん〳〵の御名　弟子法人之孝法師　唯　百歩の一方
無氣百歩の反て自名也　乙忠方ふるてし四季を送る
合給ふゆゑ人めいらく合られしるぬる乃心なる事
れとくれあるを里　教の法を
荒人不　揚用蔵人めーつの日大気にあるを
あとれみあうひ　震忌也
沙とかも　琴ハ也名第乃琴うり琴
はくうを絃のけ拍膠つ弟なするなり
弟んざんはうり　震著乳家ともれまへきそを見しを
今自ふれく組作とるすを裏ふくハ節食うり琴記

しれすとなり
梅の枝　梅の枝　梅のもとにをある景や春うりてきれ
まうりあてなけとをいまを常をもりけく
宮ゆうこひ　拝奉うを
蜀江の　蜀の事を郢曲の事心をあるを宣旨の物品
を代りくを　いりまをの聖へ心のあくうれむ花
しらくををの世を知ぬて
名をめを　源ひをぬ也
うくひをの　乃木　ひぬや　接遠　花の文をあり
をみるうん蜀江の移くく乃行ふをとを海を
ひありて　風をひのあうと業情雲乃あうをの吹うれ

へ給へりと笛は海梅曲あるゝむむーのや
なさけなく　まへれ音の音と音情と笛くゝれしとや
聞くゝ　音乃かゝるゝゝとを物むよけゝ鳴るゝなり
月花と霞色たてそを島を鳴るゝんとなる色ーよこ笛
と感して音もゝゝりんとる音を
海ゝとゝ　まへ乃音へ明るゝさけやゝゝゝこゝゝゝへゝゝゝ
ゝゝゝゝ美的ゝゝこに成ゝゝゝと面白き撥や
浮世ゝ　源氏乃ためとなり
もゝれゝゝゝゝ　赤旋や
花の兵衛音　ゝゝゝゝ

又なにこと　心詞ふてはかいこ　たきくれ歌うれとる
又なにゆへにはかもまんとうやはりひあひとる中
なきをとなる
うゝ　ひりはいれとなれと歌淺と侍従ふひあとゝ
（たゝ）ひくさうはひやゝ
ひくてゆれれとゝ　秋好中宮はの
宮のはゝ　秋めれはゝ　ゆゝ
御ゝあ　内侍なる人はを役とつとむるなりとある
内侍のいとくをゝなくし
うへと　紫上もや
はりをつまをき　源中へ乃尚をれ時直衣

ゆめ夢なる　中宮へ　夢乃事　をれとるをとゝれる
ゝ伝儀ゝ侍ゝ
をくを　こなゝゝゝ中上ゝるゝをとなり
後の君のため　中宮行啓をとなり
心せくゝものひとを　下にはりひしとるを
いのなる事ゝも　何やもをゝおれことくゝをゝ或とも
ゝゝ　的石上
ひくゝ所　可筆書てひくと双
大ゝゝゝゝもや別てゝを筆を不及となり
きりを　思前
をゝをれとゝゝ大ゝ　姫ともなり

たいく――よ　退こし紀なり

こやうざく　うさく　行をや畢竟（ちやうきやう）かめしる詞也

乃ひぬ　舌涸い〜き〜まぬ　そて源の姫君も泣延引とや

たちなら乃この君　掃うしれたる者と云こ

原絵（せゑ）向（ニヲエ）塩不言〜〜いとあさや

あの海のうこ　ぬる乃姫君

たけいさ　桐壺

文字も　むつかしきなり

松の下のうこ　源自分法筵する　卜歌う

やうくちん　ふかなり

〜ぬつ乃うこと　源氏笑ひ　明こ重ねる詞

うんなのこうん　す濟（さ）　うれ者うの今朱義成ら

いろ〜ふ　いろ〜ふうへとちりぬ　大安寺獲命

僧の俗　ひのよたれうよりゑひもせすきて

弘法大師沸俗　永字八法義　又慈覚とゑこ

往古乃和語也　万葉日本紀也　拨也

ゆたうなこ　不寛

たへう　ぬよなり

とうり　外ゑこ　やちうきひの奥をわうといこう

ぬてを　源氏なこ　ひゑひ　やなり

きこ〜こ　ふれ　ほ　しこ　たくひうきとゑこ

こ〜をぬこ　さうゑこ　源氏うこ　ぬたちしこ

源のうせくしきとあるうしの源ハさをるうまーや
いふあるうの
文化御て秋好の也ひとやへ行ふ迄よきとなり
より元面　つよきはるを白めりよへきたにひるまとう
白をうをいや　落葉乃宮ふ迄ふる
うをと迄　月の一極城ひうちまくーくせあうちれさ
筆法なり
さりへと　朧月夜と　樣殺と　紫上とうも
すくーなて　惜しふうとなり
まんなのまくを　すくむをまうり奥なくぬと云詞也
さうりしをひくまとけなくぬ　物すやうん

まくいよくく菜よるうとそうふるものとなり
まくうくぬ　ひうしひりとふこ双紙寒物なりを
書猶とる双紙と云ふ乃ふ　乃又巻猶と双子と二ふ
とも云ふ
巻ア　巻や　左衛門佐　祖とも
ひとうひ　一双　菓子一指や
巻ーきこいふをうを　いまーますなり
ふれかめ　紫ハ巻うふ行ーと行自慢ーや
海めやのふ　源うり重てあうはーてと行孫也
うをやうちたうう　古蘿乃落掲なり
式ア文九兵衛佐　文の息ふ末拉九母乃兄也

ありてうさ　字をつてかきとめたり
中務卿尚篠葉兵といふ事あるや
私　みなもと又芳家歌とものやうみて文字を書けり
双子の表紙なとふあるとみなり
惠門　惠命の不ふれを例と云こ
淺みちなる　四月天和法
いつふそや　浄蔵門　寛和二三人へ寄せりふなとに
法師　堪能仁ふなり
ちろきあるのき　白紙を筆門墨やうふみ四
ひらハ一枚二枚也
そはみふる　正風ふあるを

三ふてりふる　双紙の用文字あるふ
筆なりけりてつし　文章かとの表及ハかはきこ
玉　超　古事　今集公筆をあるといふ詞
ようてんハ山地紙ふお遠をり
うるれ中よおなくてこ　兵衛佐の
中ハ悠多れとも志ありて源乃氏作るあるハ
ーふるこ也ちるこふふ係ふとあるはし
ふ紙かとそれ事ふるや
かき紙る　源乃氏筆門双紙をも出紙り
唐のみ　唐紙ハふふこハあきなり
ちるこもふ　紙のたること

おこう なこやうのるいの
けらふのさ 草まを
女て 女の御を源乃あそ[illegible]るを
只御ふんの涙さへ
獲麟一句涙ら筆俱文集を又相遠[illegible]こ[illegible]ハ
感涙なるへし
獲麟 哀公狩に出て獲麟を道代に出タルヨトを
聖代に出て仁獣を書とを不識とを定て孔子をそ感心
て出たるを夫指の注に対麟説海[illegible]るとを又て及[illegible]
爲 吾道窮[illegible]乃一句と云詩を果のいと
不入[illegible]なきを次に注し

あるのくんるの 京の紙屋川に
のうをともに 不くるの双紙を書て[illegible]
きぬ ほるをしちをを
てくるをくをへ 文法に文字を書
をあるをを ことなる風流の文章撰して也 唐風一うと
あるをを心得て可強
水れのさほひ 葬をを芳乃祭[illegible]文字なををうをてあ
なををも忘れをくをみをあるのなり いまの[illegible]
れり 走てすみるをもをめをる詩なり
りやう 文字板也
ものを海へめへを 芳をを清へ翠ををのをるを

初あのみ　ゑじ　ぬり　文乃法ゐ
法文ゝ　錦紙のくるまにしきやまなり
法子ハ　兵部ゝ乃法子ハ治部也
植長乃二の法子　植長　平城　源氏也
ちゝのみゝのゝ　古万葉集ハ字あるさとをらめやも
いめ〳〵と云心ハ他冷部　四巻ほうゑなかのためみ
撰してゐるハ　ハなる也
平城と奈良乃御門とハ　又聖武ゝ　ゝ　しなり
万葉ハ聖武乃時代ゝ　新撰　撰して平城天皇元年撰之
撰者恒世覆俊成　撰て大佛ゝくらゐ也ゝ奈良の御門と
なゝ〳〵ゝと宣家　勅撰也

延喜ハ　みのと　法即位ゝ　八年して右今撰之法
法宸筆ゝ也
あれそん　紫式部の父の唐ゝ　ゝなる也
ゝ　きむのゝ　玉乃父も同表紙ハ父となり
だんのゝくを　法くに組ゝ　ひもゝ
法てハすゝと　俊成七十二　撰書り　唐の王義之ゝ法ゝ
ゝくとなり
ゝとのあゝら　切灯　壹也
女子なや　秘ハ　女ゝ　法ゝ物ゝ　ゝれゝくを
無墨用ゝてゝいのゝまゝて男ハとなり
法後ゝ　源ゝゝ法乃法後へ　迎都

上中下のこゝろすがたも皆人へにすぐれ
たるこゝろばせ文のかたはらなれ和歌をよ
くし給ふあれ 猶こゝ宮殿の中より別てひ双子なとゆう
しるしをもふなり
うのひされ 絵合こゝ次ぐ広ゐ石乃二巻ほうりを出して
を余ハ御したるこゝ云こ
うちうたとく 彼仕 姫君もを并
うの人 夕雾 夕乃雾ゆこゝ故ゑ文へを不成となり
一こゝ 夕の雾にやされ時をゆるしをめられぬ
あひこゝ我様(アヤリ)とや
たまあれ あるをぬやをひみりてうあひことねをたをふ遠
にくさまてう意こゝ
れこゝたやこゝく 源の夕雾ゆりるを
おのれとこゝ中勢 ゑを孤
のやうれ事ハ 見こゝりタゝを教訓(ケウクン)
又はをこゝ桐壺れ芳のはゝ教(ケウヘ)を仕作なり
つれくこと をゆ方るゆくくをゆこゝぬる出来れ羽とを
ををひこゝ をりこゝをこゝ云伝説を
ゆこゝけなくこゝり 源のはゝ中 文を禁中
世るはこゝ不められ をハへ乃る
位れあこゝく 伝説ゆ退(ヒタイ)自由こゝ遠事あり
寛平 遣渡(ケンカイニ)れ大和 ゆ平 元年 於(オ)ける中 三不失(ツカヲ)

とりあやまちて　よかうゝみてゝゝゝとかりひて　をかう
きにあてすとをも堪忍（カンニン）専一となり
なゝひて　白
りきれやのむ　めのれやれむ　又女のれやなと
をかてたうなくとも人うゝよりて堪忍せうとも
かりさまれ　教訓（ケウクン）故実入てかりさまへとをむ不義（フギ）をと
と思ひ定ぬ人をつゝめつゝ　初てをとをんをそ堪忍をん
やうとまくをれとをむなり
女を　ねかしをれをこの方　又乃浦歌（ナケキ）ゆへ　ををを
うへをつれなく　芦根をふうを気ハうへこうつれなけを
下ををなゝを思ふむと　をれのむれ中

法文を　をををの　又自他れ
多りをこと　をを　絵とかりふ物うゝ今ゝうををを法
をゝ法の教をれまん　夕れむを偽（イツハリ）ゝも教を又法
をたのまんうと　をむ意（テイ）
世なれゝる　夕乃文ををれひをををゝ乃を法へを
文教ゆも　中勢の夕教聲をと源へ　法師と文（キ）変形為り
法むををうを法ゝ
　　教仕れむを双を
をのひて　をゝをを文れ法ををゝ法なり
れとゝの　源れれををれゝ　をををうををうゝをなり
れやをゝみ　教仕乃ゝをうりゝ　教をんうをなり
をを法をを法と　をを禄法へり

ひとくまて　雲井の心の程と思ひやられ
いとあらはなり
つれなくて　雲れつれなきハ世上れすゝひなる式こ
なるの巳ぬハ　世上乃人ゝひとりのひとりそとなり
ゝきはなりを　中勢の姫君へ　の事とゆゑ
てゝ　ゝとこ世ゝ人ゝ所ゝと恨なりゝ也るゝある心中也
のきりとて　ゝとゝ　ゝきゝ　夕乃心中　勢へひくゝ心とゝけ
ハ自他乃ゝ　ゝなりゝ　ゝこるゝ　ゝゝ　ゝゝゝ

以討ゐ奏る　源氏物語九乃春ゝり冬まてのるゆあり
ぬいつゝきの物語　ぬ石ぬ所毛のむ文へ余語事や
かれくしゝ　毛井乃るゆゝとゝりひゝゝ物ふむや
関守れ　人毛まぬ目の面語乃関守をゝひくゝゝふあ
物なくゝん　殺仕とさゝてゝの討るや
人わろゝぬ　外宮可語ゝてこなゝゝりハやゝゝとや
れとゝの　毛へ殺仕乃タの中勢ゐ乃事ゆゝゝゐ所ひ
ゝなり
うむきく　ゐ毛まくく大ゝゝゝきゝは濁毛皆れゝゝさ
ゐゐの物語ひゝあゝゝとゐる毛

語を語ゝひ　みとゝゐれ非ゝ海ゝきすゝなゝゝ我の
れ意とゝ語意ゝゝ不せ
たきゝゝぬふ　むゝ者ゝむゐ定めゝなゐゐゝあゝ海
つよゆゝ語人やもゝなゝ
うの文ゆゝ　中勢の文ゝゝゝタへ有りひを語ひて後殺
仕ゝゝきいゆくゝとなゝ
ゐやまゐを　内くゐるゆゐ白殺ハタれ毛をけゝゝれ
ゝとゐる毛
うへをつれれゆて　タゐむ物をれ語てゆゝゝなく殺仕
ゐる物語いてゝん毛いゝゝとなゝ
三月廿日　大文三月ゐゆくゝ走ゆるゆあくまてゝゝゝゝ

まゐ蘭盆とくゝ四月とあるゝ 諸兄 呼 牧柔

五陵服の事 おなじ不入るゝ

あくらくし 極楽寺 服喪 建立 源氏物語 殺仕

服喪 はしてをり 御家 代 葬 死 蝶

こゝをなくゝ めの御法の山ふかたてし 言も

あのところなり

このれとく成 夕心 心ゆへ

法ゆうを 解る内 ことうん 御心なり

みとまやう 法ゆる事 布施 御法 仕 設

人参勤左之

ゆゝ 御法し 大文 なを

あまぎ 毎 可成 夕法 所

むとれめきて 夕夢乃 今 一へ

ふりとれ 御 てなり

あうゝ 服 ことく ふ乃 香 つゝ

しゝ 人 大文の 弁 別て 御ひ 極

色 法 むけ 大文 夕 殺仕 なのめ

恵 となり

ゆるしゝ 服 弁 第事

むあそゝゝき 新 刻 討

ゝ 殺仕 夕乃 ふなり

よゝゝに 服 世 る

ぬくしうん　何とする次第仕の夕旁と

ご度却下しめをなり

此いたらば　七日　来る七日とをくれをくんぬ

ひとしれぬ花のり弟　海藻をそのるや

日の音乃ゑ　ものゐおぼをを四月神ゐろ也大ゑ乃なく

るを海ゐ春乃来つゐをゐろや

けふいと面白き　枝をて ゑれ面白ををれ

ゐちつ面白人ゐも　ゐをゐれ花乃陰乃樣ゐて心と

きめれあり

中くゐゑ　中くゐゑりに大事也海ゆるをしゐ

よつて中くゐゑひたるとなる事ゐあを見乃ゆ

ゐあるを　と次第を敬をゐる心の

おくに　臆ある事ゐる次中ゑを引越し給へとなり

わたゐうき　ゐとくゐ人ゐ信力をいかゐとをゐ力

ゐたをうゐ人をもゐゐ　恨管

ゐうなのゐ　大文のおを　ゐくに見回心ゐる之巻物

ゐる恨をとなり

神ゐ面ゐを　双　夕乃心委元

さゐも偽ゐ　夕乃討

わををつゐひさゐ迷　わさゐの偽なるをとるを

いのなゐんと　夕の心

かゐひたゐれ　浅ゐハ三月すゐる心なり

相系後乃祖　あくてもあかぬのこしるや次第くに花四
まなるや今宰相中ねなきを二藍八月のくゝ
引ひくろひ給へとなり
ぐして　賢乃子也
心やまと　殺仕れ夕雾と給ふ河内守乃子
ものうさく　きやうにく　苦　かめしる詞也
うれそ　源也
ほされ　王氏めさて政事ならんとて不祥会となり
むの花　西白詞　内大臣詞也
夏ふし咲ものく　夏にふし咲ものなれ　夏に花拡るのこ
やるおりにまるうれ

なつのゝ　ゆのうを　嘗とめるよすがうりや
月さゝ　七日ふるうを　牧まうの可見
久繼ひも家礼　史記曰
高祖牽父大乙之家礼　高祖陛子ト云也
大乙父ト　内大臣也　花多ゝ乗　他人子ゝ准して礼をうすと今の世も
家礼と云ゝ　官位のさくれやうてうを也
そんたやく学文志なれをとなり
るふのゝうを　儒道のあるを
いうくのひゝと　夕礼詞为殺をてくと殺仕大臣ふ
つゝみをゝとをるを　河内ふをとを大文右殺

仕掛政なやつりうきなり
御対面　対宜　対宜可殺となり
面白うゝ柔　内大臣詞　春日山を兼けうゝ柔乃おとけ
て忘しと思て我も我もまん
紫よ哥　めとハのあんなやゆ和哥と紫よをそ和哥うす
なゝねそのとゝまんとゝるゝ　松うり思てゝそ松まと
咲こひ花をれそ　松と結ふをてれ　内大臣哥
をゝさはうり　天盃（タイキツ）をのてハ庭おゝるゝて祥楽すゝそ
花を外（タイキツ）男の家礼をゝうゝはゝ行ふうや
ゝうゝ面り哥　ひぬそ　引哥不及
たゝめれ哥　玄井もみゝる人うゝにゝのまさらんとそ

すんゝうゝ物れと　巡幸（ミユキ）巡幸（コトヒク）哥ゝ行ゝるとなり
松のまゝり哥　玄井をゝをてそ
ありり哥をうゝ　芦垣まのまゝきわをてふこひと
とひゝすゝとれ　二段　てふこひとゝれのあのゝ
城杉やゝまゝうゝ行らゝを　三段　ゝゝ行ゝる
家乃をゝとゝめれやゝまゝうゝあゝ垂ゝを　下略ゝの
哥のひそ女城ゝさなひて芦垣を越ていめゝるみゝのこ
ゝ紙れとゝめのれやゝ若（ジヤク）ゝゝ云ひそ
夕旁のゝゝうゝめの事　城れ屋にやゝさんやうゝ
ゝうなゝてゝうゝ面り哥やけうりゝ乃行ふそ　哥
けゝ屋をう　む字

年へぬるかの乃詞をとゝはきるて遣るゝ心地
うるはしゝ引の色てをへるはけるとあるをなり
今様祝ふ様おもはゝとゝろきるとうゝをてゝとれ
ゝ乃わさと僧馬系を引おとをてなり　花の御式部
あの相続服(モチコ)
ほとくゝたう　文遣ひゝ乃をくゝのておの言ありとく
ゝの始めをもみゝられ　れとゝろくゝしさ心史歌も
交たるあひゝされそゝきゝ心の
花乃ゝけの　夕へ乃中乃詞
松ふちきまるを　老蘇(トキハ)なる松ふちきれる教なきをを
のひゝをを八咲きれ　夕詞あゝくゝ丸心なれ言ゝ

遣ゝし屋あゝとなり
ゆゝしゝやや　ゆゝなるとあゝるゆゝしやとるを
中おは　歌中夕ゝゝをゝさるゝゝ歌をゝなり
ゝけのゝくをおを　ゝけよのゝ作心地
ちなたゝりとけゝるをなり
在のためゝ中も　遣へ乃夕の経今を心乃ゝゝらぬゝて
歌や　遣するをたゝるゝ物とをきゝひをも世乃ゝめゝ
中も成ぬ知まられ
ゝさゝゝ　ゝさくゝ紀心ゝ　ぬゝ　ゝとをゝ
ゝ歌紙仕へ中ゝひゝゝれやうにうたひゝゝう
遣を夕乃心ゝゝゝおをやゝをてゝゝをゝれ

とのゐふなり　哢

川はのとう　はは乃図れあ〜四ゑや笑のあ〜う天

やゐをれともくいて〜我孫ぬ屋をゑれ鳥遠

はは　呂僧馬樂（リョサイハラ）　はは井図のあ〜遠守ともいて〜わ

れ孫ぬ屋ひくくに我ねぬををんぬるを

忘れとと新のれ〜〜ゑんゆ中れを守（モリ）ゐひ〜〜とを

つぬる新のう〜〜ゑりまけてといて〜ゐ図り〜るををと也

あををゑと天　忘井ゐをれゑとをの井れれやの四をを

夕旁乃詞ふつひもう〜ゐるゆ也　ゆ〜〜ゑ〜〜ゑて

ハ夕旁の詞ふ伊ひもう〜ゐ事なる屋〜図ハ八を

れ図やるれゑりゑりゑゆ屋るゆ　とゑて屋ゑよめるいの

ひもう〜〜ゑを我孫ぬとゐ夕旁れ音〜んとあ遠を海

ゆる人をいうてもう〜ゐんとゐめくゆ　哢

をあをふをゑ孫ぬ屋ゑる詞

をりにをる天　花を儀才用　白川くをを　笑宵

六十八つ〜〜宗図也　奥別（ネダ）兼図の笑をれつう〜人

丈あるゆ川はのをみあ〜ゆとゆ　哢説六のう〜をの

哢れゐを也ゐ乃う〜ひ〜ゐハ夕旁のゆ乃新ゆわひ〜

ゆ〜をあををそうたひ〜を夕旁乃笑乃遠遠ゆの紡

ゐしをゆ天のあをゐゐをもう〜けると振（ウラミ）て又ゆ我る

ゆ云〜

年月れ　ゐ乃ゆ〜くゑ天あゆ遠と酔（ネヤ）ゆ〜ゆをなり

ゆくらもたるを　不及門方　但詞ゆうう　ゆ篝あくる
もたるすねし　ゆと義ゆるみ　ゆ思ひ事きや
ぬしをてぐう　歌ゆの中なる
ゆ　くきふを　雲ゆ事さそうう　ゆ人り
作文せさうゆう　文れ詞　あれひとけぬなり
又をきえぬ人きを　以前の心重より色氏となり
とうむふよ　思ひ　ことも堪思（カンシ）うゆ　ゆ事もあう
もたく成ふうを人をとうむ　ゆとなり
むりのあは　双　昔夕とひうあうす　行ひしゆ
大のあうなり
作の通り　御返事あうう　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆをのうう　ゆ近ゆ盛りゆ　ゆ　ゆ　ゆ　

ちやうしろめたあのゐ〳〵香うなり
もろさあや　あ〳〵乃あやなり
くそんかり　九月八日
國史ニ承和七年四月八日　始律師絡灯　大法師法静
あおぎ法濃殿始行灌佛事　仏を俗て水銀あひせ奉
まるるをいう
わ〳〵もへいう〳〵　親王大臣以下布施を大裏〳〵四つう
すをふ　時
ゐをなく　灌仏乃布施ゐ者を殘を用ゐる殘中ハ
紙ふなられをふ所行くことゐ成ゆゑ
れきのへ乃さほう　大裏乃儀式

わさと多〳〵孫と　夕方に仏たうをし人なをるを
ありゝうんやを　れとて叩くあふこうをを成ゆゑ
水りゝさゝとちきりし相を
仏方れ仏殿引の色ゐ色　雲間乃契ゐくあるとなり
女法あ記てん　皇牽とうへを
小女　女法の法母内大臣れ如方乃まゝ母又女房乃
姫なり
あせちの小女　乞の母
叩くて六条院　的石の姫君ゐ文へ系ゐ乃り
たいれうへこあれゐ　聖上今奏又廃之意中ゆ
聖上関の日代暁に出うて行へ星法乃来　玉信嶋九月

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』　請求記号 857-118
ガラス使用

雷神(イカヅチ)とうみ給ひ〜ぬと云ふやさて御生とも書形(カタチ)あ
らはし給へ御放生形(ミ)なり多くある神館(ミ)ハ〜すと〜下賤
ハ御祖(ミヲヤ)とのゐれきみうと云ふ〜ありと云ふ〜すに
あるゐなる〜御禊(ミ)とも伝経ゐ云〜禊そ見うき御
形(ミ)御放(ミ)のむかひなり〜給ふる
ホ〜くさも 紫上遠さく〜なん所と祈りひて名
ぞ所ゐ〜給ふなり
給さ〜ゆ 紫上御所〜きする
れをうれと 紫上ゆ不うをうれとたう〜まうる
なりひけちうを〜 英上(アコヒノ)心指や
の給ひあちて ようゐぬ〜なれ乃給ひをちたる

なけさ和ゆ ありうれとたもうあ山に成るゐ不行ゐれ
れものと人れなけさハ
ゐをなう〜ひうれ 秋好中宮に成行ゐう
ハうを給うん 源ゐうう給うん泣まてを給や
うるゐ 紫上御さ〜ゐ上ゐ乃〜〜へ出給人り
遊御給ゐ所の役を 仕中
今世をそもと御役ハ偽(ジ)つ給ふ子母中ゐる代御ゐる車
なとに乗て京遊と具をゐ京極をを〜給〜ゆ人る業人
陪従(ヘイジウ)とをする也 遊御(ヒカル)給ゐ
いそ〜ゐ所ゐ ハ大殿ゐそ皆装束(ショウゾク)なゐて出立の所
ゐ源氏乃さ〜きへ皆乗給人り

後世のまね 惟光のあつ夕方をとしあまりそこらかんうけ
しなりひ人なり
あさましれ城のつ〜夕と雲との浄中
定めるハこやタと雲との浄中定ることなり
何ところや方 夕方 何ところやうん苦のやうふ蓋成ることと
せ久〜きあひ浄ちぬむこやかさ〜を愛ともたせらと
のつハかくなり
行ちまし〜行ちぬ のつるおつ〜なやはるこし浄ちぬとも
うさしてを方 お撫(カウ)を夕方のをを文章(モンジャウ)生(ジャウ)とすくあつ〜と
ひへをめさしてもたふひとを云るすを長るくやなり
を浄ちつ〜とて撫と云る

牧(キクヒ)撫(ナデ)抹(スリ)ノ一枝(ヒトエ)嵩山(スウザン)ノ月(ツキ)ノ光(ヒカリ)ノ如(ヤウ)ニ及(オヨ)ブ事ヲ述(ノベ)ル及(オヨ)ブ事
とひ月ちつ〜たを 墓(ボ)穴長冠(カムリ)〜浄ける親母乃
うを浄ちまる 久堅の月の撫もおるはつ〜家乃風を
も物のせてつれ
兼(カネ)風 を愛ちつをてなり
博士(ハカセ) 兼(カネ)風のおつんをを行ちる浄ちる
浄ふ望ま 双紙
小方つひ 紫上 姫君乃浄ふ内ちなり
ちれみつ〜浄ちとや 白石上
あの浄ひ中も 姫君乃浄ひ
ちくひとれ 紫上の心や姫君白石上なとにを云

あるらんや

見たてまつる　めのとの母なども見たてまつらせたり

ほのかなるまゝ　明石上

その御ありさまを見て　紫上を同車の明石上うちまもりたてまつる　花多き尼ひとと花仏御供(ゴクヤウ)に

まゐりたり　見も明石上

人々ゆかしがる　紫の御子なりとなり

あの事はいかゞ　紫上は殿に御子のおはせぬを

三日もすぎて　明石上系図(ケイヅ)ある人　紫宴(ムラサキノエン)に

対面あり

御ものいひ　ひとさだめ

御禊(ミソギ)　見を嘆きまゐらせ給ふ　姫君と母乃尼とこゝまうで

て紫宴にひとゝ私ならぬ明石上と双地よりさらむ

むへこゝろを　源乃明石上には心深をむとる

又ひとゝ者のう　明石上むすめをうたがふ心中や

はてゝこゝ海　紫上　姫君を大切にとのたまふ　乳人(メノト)

ものゝ御ものを　うけとりさしもいとまもなく

御ものゝ　引かけむとのたまふ

文も　手文

さすがに云なり　明石上の殿ひろきといふ

うへ　見たれへさ　紫上

あなたこゝろ　明石上の心可憐なりや

一むらへなりを明石上乃母の
のたまへかりを 御道せ(ドウセイ)れ(アラミシ)る増也
たまへりうへは 堂上の御子なり名を中宮と申奉る
なれもとより 御れたりとれ御すなり
それ秋大上天皇 白畫天皇 天武第二皇子 文武ノ父
しいの下諡号也 小一条院 敦明太子(アツアキラ)と申奉る例なれ
ば 花鳥を楽しく院御門れ号也 太上天皇小今源
氏物語(モノガタリ)しるを准三宮と云むの色を封戸(フニ)給はるを
きいとあるためく 女家 法城寺関白殿 封戸くらゝ
れるを 当例の
のんし 院司別当云いなやうなるを也 河内守

四大寺の別当 殺仕の御とくれ御 来の朝臣太政の
長とみ四年 法威ひも四府ゝ御国云〻
法ゝ師ひも 拝賀諸家へ也今乃世ハ大裏計色成
あるれれとく 当年なとをりくなり
淺みとゝ 袍(パウ)又種〻花色あるを袍(セン)淺ゝとゝ
位と可云ひあれ堂も定家泰儀三位の家ゝ
を一位の家ゝや淺みとゝは七位と也 衣服(ヒヤウ)を等
なをゝ人ゝ
堂の家あれをゝ
とゝ申廣明美儀中納言従九条右大臣袍所の
いけゝ家 御りひを

八条とみんとて
二条ゝりの家 婚姻花原雅の あるふを名ゝ所者の乗
なきこもの乃あるしや業代なるらん
二条ゝりゝゝ家ゝゝるゝと称してめけとの乃よ先を
三條設の 大宮殿住家へ也 二条の殿は大宮殿淑所ゝ
きるなりゝ
ちいちきまゝも 白氏文集 鬢髪千万白 池芝八九緑
童稚盡成人 園林半高木
むゝまくきも 元のうゝ一村落中殿ゝ乃をけ
き殿人やも成りけるうれ
色ゝよるゝも 二所也 玄野乃ひゝをあるゝ

ちう 」さうゞ 曹子くゝなりゝ
なれゝ色をも奇 夕ゝ清水ゝ(三上二天九)まゝ色あをさゝてや
なる人殿奇 つれなくてを新のみもぬをいゝ ひとや
まるを所くきむゝ心れあを所殿をゝるのかとるを
いちゝあをあさくなりゝ水をゝ元
れをさいゝ 殿ゝゝまゝすなり
ひゝをあ 二所まゝまゝすを所(ヂ)人を
ゝ八又ひゝゝ ゝをあるゝゝゝゝゝを屢(ず)て入り
あの水乃心 ゝれゝゝゝ乃奇なと又てゝゝひとものを
弱(ヨワ)をゝといを弟奇芸若れゝ云詞也二所乃中ゝてを
ゝ奇弱を用殿あゝ人ゝゝとゝや

うれうこの事 兼詞ふ前ハしいみてとあり強而大
安れる事 井ゐ乃れとなりきんる成物ゐる心下ろ
ゐ事よや 殺仕事 人の業 いめ一色乃衣前乃いし
ゐ行くうんしふ松を若行ひろりゐり 河
いつれとゐ事 めりをや うちゐて活したのむ宮
乃松をゐる秋れ風るもこつる
弥三月 康保二年十月廿三日 村上天皇朱雀院に行幸
ゐし例をうつして書りゐ
たか 馬 六条院御用之
せしやう 幕
えげ一所 御厨子所 主上の活膳を行ふ所所

六条院ゐくの事也 大裏ゐる所乃と今日ゐをら
れくし 光る乗
西れれ人 秋好中 秋のゐるゐを也
いやくしちをつくて 親乃り幸ゐる帛給
ゐをて上皇を祥一行ゐる歌也
蔵人所 康保六年七月廿一日 殿人部延光朝臣
助満仲 近府生多ひる 近衛長幡廣国 並ゐ御弓調
ト云く 書飼 殿人所れ被ゐ也
たゐの 初のひ書飼 別ゐる 仏ゐを但 遠にゐ
おゐのみ 活膳ゐ 海いゐ也 御
みゐゐち上皇戸 王ゐを献物ゐ成ゐ人れゐ

わ横（ライウ）　後園（コモ）なる竜

大ぶく　はなぶく　こぶくとゝ云なるゝ

かつうれん　交玉夏

はつきれとく　後仕

うゝれみのを　南ひ

はなきれとく　子息弘勅禄之時又藤蔓（フジウル）定家や

又海され寺　朱雀院乃庭（ヒヤ）代にまきくしる成こゝ

らゝとるゝ　源

れとくゝそのわるハ　後仕

れあのきゝく　源ハ兵部卿子あつめうゝ話とや

是のもゝ　後仕　是（ケ）もゝ寺昌の代元慶（ゲウ）と生時堂（ウム）出ゝ

清昌共云ゝ豊代加陽（カヤウ）也又紫ゝと禁中乃るゝ

ゝ紫の宮兼ゝをあるゝ　久ゝ乃宮のよゝそみゝ

兼ゝ乃漢ゝそあやまゝきけゝる

時ゝ　右今　秋をゝきて時ゝそゝろけきゝく乃花ゝ

ろふゝに久乃まきれゝる

けゝきをゝきゝゝ　後後ゝ浦（ヒキ）ゝ白樺（ハヒ）トンクリ　赤白

ゝのをきあのきゝゝけゝるゝゝ

差別不能ゝ紫（ムラサキ）紫と可心於　花者ゝ委

けゝゝゝのきゝねゝゝ人をゝとなゝといひ時ゝわさ

海ゝゝくれもゝ也

きゝれみけゝふひゝをゝ　ゝあ者ゝきの額（ヒタイ）をゝり

ひく事　樂不及用意大概ことなゝし机拝なとあまた
ことくしにたとなり
ゆんたけのさ　出家　女司　琴なとあつ明りやうあり
法紀延喜八年節会雅樂寮左樂の後名和琴　女多
法師出家　唱歌出仕座奏之
うゝ乃法師　寛平法皇御業を絵にえ名　和琴
秋と百そ　朱雀院
うゝめ一あ百そ　朱雀法左位ゆんめ出るりうゝと
下を御遠懐也
あ法の乃　天子朱雀院御代の業乃変れためしゝと
ひくとなり

ゝゆゝ乃　源と法門とあの法形也
中納そゝとゝく　おゝゝやうなるをいのゝをなり
々を回樣なるとめゝゝひ元
留　夕
中ゝ　并ゆゝ可絃とゝゝを
法なゝらひ形めり　ゆゝ乃紙世と意乃御指絃みゝた
御となり

857
118

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118

ガラス使用